鏡の谷

木崎さと子

新潮社

鏡の谷

鏡の谷

一九九〇年一〇月五日印刷
一九九〇年一〇月一〇日発行

著者　木崎さと子
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号一六二
電話（業務部）03―二六六―五一一一
（編集部）03―二六六―五四一一
振替　東京四―八〇八
印刷　大日本印刷株式会社
製本　大口製本株式会社

価格はカバーに表示してあります。
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

Satoko Kizaki 1990, Printed in Japan

ISBN4-10-366102-X C0093

鏡の谷

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongboo

(一)

清らかな水にひたひたと洗われるように、淡い幸福感に全身が浸されていた。仕合わせだと想ったとたん、どこからともなく白い薄光が射してきて、頭のなかの闇が明けてきた。

三緒子は重い瞼をうっすらとひらくと、眼球だけをゆっくり巡らせて、あたりの色を窺う。ほんのちょっと横になったつもりなのに、いつのまにか眠ってしまっていたのだ。庭の樹木の枝葉が秋の陽に透かされているのを、ステンド・グラスのようだ、と薄いカーテン越しに眺めているうちに、そのなかに自分も溶け入ってしまったのだった。

眠っている間に陽は移り、北むきの部屋のなかには黄昏に似た弱光が、海底を照らすように寂しく漂っていた。ガラスの表面に薄翠の藻が付着したアクアリウムのなかにでもいるようだ。ぼんやりとした黄色っぽい光芒のなかで、三緒子はものうげに躰をうごかす。巨きな蝸牛(かたつむり)のように、殻からのっそりと貌だけを出す。滑らかな艶を帯びた、灰色の角をぬめらせながら、瞼

を開けたり閉じたりする。
淡い幸福感が躰に残っていて、起きてしまうのが惜しい。しばらく怠惰な恰好を続けている内に、幸福感は消えて、脱力感だけが残った。
ひどくだるいが、それでも起きなければならない。殻のなかの闇にくるまって、なめくじのように躰をまるめていたいけれども、そうなってしまっては終わりだ。
腹部から乳房にかけて、双の掌でゆっくりと撫であげる。呼吸もせずにふかい眠りを貪っていたような気がする。息苦しいわけではないが、眠りの泥のなかに失われていた呼吸をとり戻すつもりである。
三十代も半ばの躰はこの部屋で過ごした少女のころと較べると重くなり、にぶくなっているのだろう、なかなか起き上がれない。ここに戻ってからすこしは肥ったようだ。居候の身だから、と遠慮しているつもりではあるが、やはり生まれ育った家である。義妹の弘子のおかげでらくをしているのだ。田舎だから空気もいいし、と三緒子は東京にいる夫の勝巳にむかって言い張るように胸のなかでつぶやいた。しばらくの間だけでも勝巳のことを忘れきっていたいために大矢谷に戻ってきたのだ。言い訳など考えることはない。
体内にこもる重みを抱えたまま布団から抜け出て、寝台の上に坐った。指をひらいて、乱れた長い髪を梳いていると、眠っている間じゅう誰かが自分の上にのしかかっていたような気がしてきた。起き上がれないのはそのせいだった、と気がつくと、三緒子は逃れるように寝台か

ら降りたつ。重苦しいはずなのに、清冽な水の感触があったのは不思議だった。
窓辺に寄って薄紗のカーテンをひらく。裏庭には秋の午後遅くの空気が藍色に沈んでいた。父母が揃ってこの家で暮らしていた幼女のころ、三緒子が遊ぶのは日当たりのいい表の庭で、裏庭にはあまりなじみがなかった。冬は雪が深くてこどもなど埋めこまれてしまうし、夏は蚊が多くて近寄れない。ふだん行かない場所というのはこどもにとって、そうでなくとも神秘的なのに、そこには蛇の穴があって白と黒のまだらの大きな蛇が棲む、と聞かされてからは、いっそう恐ろしく、それだけに気を惹かれる処になっていた。
本当に蛇がいるのだろうか、と三緒子は窓越しに、山牛蒡の紫の蔓と実を透かすようにして、裏庭のそれらしき辺りを眺める。蛇について三緒子に聞かせたのは、おときさんという老婆だった。もともと小さな躰の背が骨の病に罹ったらしく曲がってしまっていて、幼い三緒子とおなじくらいの高さに、皺だらけの顔を寄せて蛇の話を聞かせたのだ。母が重い病気で入院したころだった。その蛇を捕まえて生き肝を「奥さんに上げさえすりゃあ、すぐに治られるがやれど」とおときさんは窪んだ眼で三緒子を凝視めながら暗示にかけるようにささやいた。生き肝とは何のことか分からないままに、三緒子は不気味なものを覚えて、父にもその話をせずにいた。それさえあれば母の病が治る、という妙薬が本当にあるならば、それを父が知らずにいるはずがない、ということもらしい信頼もあった。父は神主であり、神様達と親しいのだ、と幼な心にも誇らしく感じていたこともあった。

それだけにある日いきなり病院に連れて行かれて母の死顔に対面させられた後には、父や神様に対する不信感とともに、おとき婆さんのいうことを父に取り継がなかった自分が後ろめたく、ひそかに後悔した。

さらにその後なにかの折りに、このお宮のご祭神は竜神であり、竜とはすなわち大蛇のことだ、と知った時には、深い恐れをもって、おときさんの言を思い出した。老婆は神の生き肝を取って母に食べさせろ、と幼い三緒子に示唆したのだ。おときさんの窪んだ眼に宿っていた光が異様だったのはそのためだったのだ、と三緒子は恐れつつ納得した。

母の死後すぐに父は再婚し、三緒子は東京に住む母方の祖父母に引きとられたので、この家には学校の休みの時に帰るだけだったが、その度に蛇のことはきっと思い出した。中学を卒業するころ祖母が亡くなったので、三緒子はこの家に戻って高校に通った。その間はこの北むきの部屋を使っていたのだが、蛇など見たことはない。東京の大学に進学してからは夏休みにもあまり帰郷せず、そのまま東京で勤め出してからはなおのこと、蛇のことなど忘れていたのに、結婚して七年にもなる今になって、急に思い出したのだった。

本当に蛇の棲む穴があるのだろうか。山ぎわに古くからある家だから、棲みついた蛇がいてもふしぎではないし、ましてご祭神なのだから、と思いつつ、異母弟の時麻呂に確かめたことはない。今度ここに帰ってきたのを機会に確かめてみようかしら、と灌木の繁る昏(くら)みを視線で探った。視線の先をかすかに揺れるものがあり、それに合わせて三緒子のなかにもあやうい感

覚が起きる。
ほの昏い繁みの奥を、揺らめくように舞っているのは黄色い胡蝶だった。三緒子は小さく声をあげそうになる。その蝶は、三緒子の躰の奥にひそむ森から、この瞬間に舞い出てきたような気がした。
自分の躰のなかに深い森がある、と少女のころ教わった。誰が教えたというのでもなく、月ごとに繰り返される生殖の準備とその崩壊を、森の奥で行われるひそかな神ごとのように意識したのだが、深い森に包まれた大矢谷の神社に、神主の娘として生まれていなければ、そんな想いをしただろうか。自分はそれを大矢谷に棲む神に教わった、という矜持が三緒子にはあった。
しかしむろんいっぽうでは、そんな前近代的な考えを否定してしまう、もうひとりの自分もある。大矢谷という片田舎に生まれたことを、無理やりに夢と誇りに結びつけてしまおう、という自分と、そんな自分を危ぶむ現実的な自分と……。
偽りの誇りであれ儚い夢であれ、そうでも思わなければ私は生きては来られなかった、と三緒子はふと我に返って苦い自覚を繰り返してから、カーテンを引く。
時計を見るとまだ四時である。日が短くなったとはいえ、黄昏までには時間があるはずなのに、北むきの部屋は昏くなるのが早い。
今日こそむこうの山の上に行ってみよう。山と呼ぶのもおかしい低い丘陵の連なりだが、土

地の人がこちら側の高みを貴船神社のお山と呼んでいるのだから、小川の流れる細長い低地をはさんで反対側はやはり山と呼ぶべきだろう。

二十分もあれば行って帰って来られる、それから姪の光子のピアノの相手をしてやればいいだろう。ピアノの後は赤ん坊の善麻呂のお守りをすればいい……。この家で必要とされる人間になって、何とか居場所を確保してしまいたい。居候の弱気というよりはもっと切羽つまった願いから、三緒子は出来るだけ弘子の役に立とうと努めている。しかし夫の姉が居坐るのを歓迎する若い女がいるだろうか。弘子はただの一度も三緒子を邪魔にする素振りを見せたことはないが、いい気になってはいけない、と日に何度かは自分を戒める。

鏡を覗いて髪を整え直し、かるく白粉をはたいて口紅をつけた。田舎の空気のなかでは、化粧などしないほうがきれいに見えるのだろうが、冴えない顔色を万一にも村の誰かに見られると何か噂されるのではないか、という危惧があった。このままこの家に居着いてしまえば、結婚に失敗したのだと明らかに分かってしまうことなのに、まだ見栄をはっている、と三緒子は自嘲した。あちら側の山に行くには、あまり人も通らない道路を渡るだけで、村の人に会うことはなかろうし、買い物をする店もないのだが、スカートもはき替えて、買い物袋に財布とハンカチを入れる。

茶の間では弘子がアイロンをかけていた。光子もその傍らで自分のハンカチの上に、おもちゃの小さなアイロンを圧しつけている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

女の子はこんなに小さい時から母親のすることは何でも真似するのだ、早くに母を喪った自分が、育ての親である祖母から大きな影響を受けているのは仕方がないのだろう。

母親の傍らで一人前の恰好をしている幼い姪を眺めながら、

「ちょっと、ぶらっとして、すぐに帰ってくるから、アイロン残しといてくれれば、わたし、かけるけど」

弘子はアイロンの熱気にあてられてか、血の色の透いてみえる丸顔をあげて、どうぞ、ごゆっくり、と機嫌よく応えた。

歩き易いように踵の低い靴を履いて家を出ると、石段の上のお社をちょっと見上げた。この家にいた小さいころには、家に出入りする度にお宮を見上げて、見様見真似で柏手を打ったり、頭を下げたりしていた記憶がある。あそこには本当に神様がいらっしゃる、と信じていたから、御挨拶のつもりだった。高校時代に戻っていた間は、もうそんな純真な気持はなく、すくなくとも自分から本当に礼拝したことはなかった。東京では幼稚園の上級から中学までプロテスタント系のミッション・スクールに通った。祖父は孫娘をそういう学校に入れておきながら、宗教というものを小莫迦にしている様子を隠さなかった。貴船神社とは世界にただひとつ大矢谷にだけある特別なお宮、と思い込んでいた三緒子に、京都の貴船神社は別格として、あとは全国至るところにあり、社号などは明治の合祀の時に神主がいいかげんにつけた例がほとんどだ、などと言って聞かせた。学校でも知らず知らずの内に神道への反感を植えつけられていたのだ

ろう、神社の建物や鳥居を見ると自分でもどう考えたらいいのか分からない微妙な感情を覚えるようになっていた。

それでいてここから高校に通っていた間は、大矢谷の貴船神社の宮司の娘という誇りを抱いていたのだから矛盾している。そんな曖昧で複雑な感じは不快だったから、三緒子は東京でも無意識の裡に神社の前は避けて通ったり、お祭りなども見物したいとは思わなかった。

それを考えて秋祭りの終わった後に帰ってきたわけではないが、その時に当たらなくてよかった。お祭りの日には社務所だけではおさまらず、住宅のほうまで村人が入ってくるから、三緒子も隠れてばかりもいられなくなる。もっとも最近はこの辺りも過疎で人手がなく、お神輿の担ぎ手にも不足して、青年団で獅子舞いを出すのが精一杯だとか時麻呂が言っていた。三緒子が高校生だったころとは、お祭りもだいぶ様変わりしているのだろう。

お社をつつむ森をぼんやりと眺めていると、脇の木立のなかに人影が見えた。竹箒を左右に動かしながら、覚束なげによろよろと歩いている姿は、季生に違いない。今回東京から帰ったその翌朝、家の前で擦れ違った青年の異様な様子におどろかされた。青年は竹箒を前に押し出すようにして、酔っぱらっているように、よろめきながら歩いて、石段のところまで達すると脇の木立のなかに入り、木の枝を手探りしながら上がって行った。弘子に訊くと、この青年は榊季生といって、なにかの事故から失明したので、新しい生活に慣れるまで貴船神社に出入りさせてくれ、と人を通じて頼まれたのだ、という。

季生は家のなかまで入ってくることはないし、三緒子のほうも出ないので、めったに顔を会わせることもないのだが、一度正面から出会って、ついまじまじと見詰めてしまった。どんな事故だったのか、まだ若い整った顔に無残な傷跡がついていて、三緒子は急いで眼をそむけた。時麻呂夫婦が季生の世話を焼いている、ということなのだろうが、とくにそれらしい様子も見えない。

小川にかかった橋をわたり、道路をわたる。自動車は通るが、人には出会わない。若い者が東京に出てしまって帰ってこない、と老人達が嘆く日本中にある田舎の風景である。季生も、この近くにある家の離れに住んでいるということだが、たとえ盲目でも若い男性がいるのは心づよいから、と母屋（おもや）の老夫婦に望まれたのだという。

坂道にかかるとすぐに深山の気配が漂うのが、この土地の特徴である。群生している薄（すすき）が三緒子の瞼に触れるように、しなだれかかってくる。その穂がすでに枯れはじめて、銀色のゆたかな膨らみを失い、硬い手触りに萎えかけている。三緒子が衝動的に東京の家を飛び出して帰ってきてしまってから、十日ほどの間にも、季節は進み、木も草も色を変えているのだ。

この山の上には庵があり、三緒子が高校生だったころには尼さんが住んでいた。その庵まで行ってみたことはないし、尼さんとも高校時代に二、三度道で行き会ったくらいで、今でもそこに住んでいるのかどうかは分からない。時麻呂や弘子に訊けばいいのだが、三緒子は自分で行って確かめたかった。というより、尼さんに関心をもっている、ということを弟夫婦に知ら

れるのが何となく厭だった。
頭を剃って黒い衣をまとっている尼僧の年齢はそうでなくとも測り難いのに、高校生だった三緒子はそんな注意も払わなかったから、幾つくらいの人だったのかも分からない。三緒子が会って話が聞けるものかどうかも分からなかった。ただ一度、父が「女独りであんなところに住まいするとは、気のしっかりした人やのう」と言うのを聞いたことがある。
もし今も独りで住んでいるのならば、とその先はさすがに自分でも空想を逞しくするのを憚りながら、「わたしもおいて貰えたら」というかすかな夢のようなものがあった。
その夢を追いかけるように、知らずに足を急がせていたのだろう、庵の見える辺りまでくると、息が切れて汗ばんでいた。
こちら側の山には古墳があり、貴船神社はもとはその脇にあったのだとか聞いたことがある。昔なにかの事情で神社が反対側の山の端に移り、その跡に庵を結んだ僧があったということか。古墳であれば死者の魂が今もそこに在る、と考えて、弔うのであろうか。
心臓の鼓動を静めるためもあって、三緒子はちょっと立ちどまった。
庵などと呼んでもふつうの木造の家である。平屋だし、松の木蔭に隠れるように建っているのが、侘び住まいの趣があった。
雨戸が閉まっていて、人の気配はなかった。しかし前栽(せんざい)など一応は人の手が入っているようで、それほど荒れた様子はみえない。

風雨に黒ずんだ木の壁にしばし眼を留めてから、三緒子は踵を返した。

離婚して独りになりたい、という願いに嘘はないつもりだが、どういうかたちで、と具体的に考えてみるとなかなか決心がつかない。東京で仕事をみつける、という方法もあるし、そのほうが時麻呂夫婦にはいいに決まっているが、三緒子はなろうことなら大矢谷に帰りたかった。

手を伸ばして楡の小枝の先を折りとる。まだ紅葉には早いが、黄ばんだ小さな葉の先を唇にくわえて、ちょっと前歯を当ててみる。みかけよりははるかにつよい弾力が歯に感じられた。いのち、と三緒子はつぶやく。自分とは関係のない単語を、距離をおいて眺める気持なのに、その言葉は楡の葉とともに自分の唇という至近の距離にあった。

坂道をぶらぶらと下っていく。自分が足もない幽霊にでもなったかのように、空しく淋しい。この世のどこにも居場所がないかのようだ。大矢谷に帰りさえすれば、と思いつめた、その根拠は結局のところなにもなく、幻影にすがりついているに過ぎない。時麻呂には妻子があり、異母姉のいる場所などとうに失われているのだ。東側の斜面の日暮れは早く、夕靄が足元を浸し、薄の影が濃くなってきた。

崖を埋める雑木林のなかになにかが動く気配がしたと思ったら、薄の穂の間から、一人の少年が飛び出してきた。おどろいて立ち尽くす三緒子の脇を、少年はさっと風が通るぐあいに走り過ぎていった。ゴム底の運動靴を履いている上に、ひどく敏捷な身のこなしだったから、足音も聞こえずに姿が見えなくなった。

少年の去った後を、三緒子は眼で追う。雪国の長い冬に備えるかのように、秋の雑木林は深い呼吸を影とともに湛えて、少年のほそい躰はそのなかに呑まれてしまったようだ。

何年か東京に行っている間に引っ越してきた家でもあるのか、見知らない少年だった。あんなに走ってこの上まで行ったところで古い庵のほかには何もないのに、と訝ってから、ふと、あの少年は誰かに追われているのかも知れない、とあらぬことを考えた。

家に近い、少女のころにはよく歩いた道とはいえ、ほとんど人の通らない山道である。犯罪など起きたこともない平和な村里だったこの辺りも、最近は山道など寂しい場所の女の一人歩きは避けたほうがいい、と時麻呂に注意されたばかりだった。東京から帰ってきて、ぶらぶらしたあげくに何か事件でも起こされては、と時麻呂が弘子をはじめとする周囲に対して気を遣ったとしても当然である。単純に姉の身を心配しての注意と聞くことが出来ない自分が情けないが、仕方がない。

少年の去った方向に、夕方の空が淡い縹色にひらけている。猿のように駆け抜けて行った少年の後を追ってみたい気さえした。

指先に触れたネコジャラシを抜き、ふらふらと揺らせながら降りていく。時麻呂は草笛のうまい少年だったが、今でも山歩きの時にはそんなことをしてみることもあるのだろうか。さっき三緒子の肩先を掠めるようにして走って行った少年は、かつての日の時麻呂を思い出させるような長足の子だった、と見返っていると、下のほうから中年の男性が足早やに上ってきた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo